自由な顛落

ウィリアム・ゴールディング

小川和夫訳

中央公論社

自由な顛落

ウィリアム・ゴールディング
小川和夫訳

中央公論社

ウィリアム・ゴールディング
自由な顚落　©1983　定価980円
昭和58年11月15日初版　昭和58年12月10日再版　検印廃止
訳者　小川和夫　発行者　髙梨　茂　印刷所　三晃印刷

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替東京2-34
ISBN4-12-001247-6

自由な顚落

カバー画・装幀　十時孝好

本文挿画　アントニオ・ディアス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

市の広場の屋台のそばを通りすぎると、ページのすみを折られ紫衣の色もあせた古本の山から悔い改めのホサナ（神を讃える叫び）の叫びがあがるのを耳にしたこともある。人人が、牧杖とも殻竿状武器とも見えるものを手に持ち、力と栄光という二重の冠をいただいているのを見もした。痛む傷が光輝の星にかわってゆくのも体験した――五旬節のときのように奇蹟的に、*炎の一片がこの身に落ちてくるのも感じたのだ。だがぼくの昨日の日々はぼくと一緒に歩いている。それらの日々はぼくと歩調をそろえ、ぼくの肩ごしにのぞく灰色の顔である。ぼくの住んでいるのはパラダイス・ヒルの上で、駅から十分、商店街や酒場から僅々三十秒のところだ。しかしぼくは依然として身を焼かれているアマチュアであり、非合理的なもの一貫せぬものに身をひきさかれ、はげしい思いで探し求め、そして堕地獄の自責の念に駆られてもいるのである。

いったいいつぼくはぼくの自由を失ったのだろうか。というのは、かつてはぼくは自由だったからだ。ぼくは選択する力を持っていた。原因結果の力学とは統計学的公算なのだが、時としてぼくたちがその閾より下方で、あるいはその閾の彼方で、働くのはたしかだ。自由意志とは、ひとつの色彩のように、あるいは馬鈴薯の味のように、ただ経験されるものであり、討議されえないものである。そういう経験をひとつ、ぼくは覚えている。ごく小さいころのことで、ぼくは公園のまんなかにある池と噴水をとりまく石囲みのうえに坐っていた。日ざしは明るく、赤と青の花々の土手があり、緑の芝生があった。まんなかに噴水があってぴしゃぴしゃ水をはねかえしている、ただそれだけで、罪障感のまるでない世界である。水を浴び水を飲んだあと、ぼくはいまあたたかい石のふちに腰をおろして次には何をしようと静かに思いめぐらしていたのだ。ぼくのところから砂利を敷いた小径がいくつか放射状に流れでていた。と、突然、ひとつの新しい知識によってぼくは打ちのめされた。自分はこれらの

* この冒頭の一節の意味はこの作品全体を読んではじめて納得される。主人公はある事件によって啓示を受け回心している。古本からホサナの声を聞くことができる境地にはいるのである。五旬節のとき使徒たちに「舌のようなものが炎のように分かれて現われ、ひとりびとりの上にとどまり、一同聖霊に満たされた」（「使徒行伝」二章一節）のと同じような奇蹟が自分の身に起こったのも体験している。しかし彼は真の信徒ではなく、現在の境遇に安住できない。過去の日々が彼につきまとい神の「力と栄光」の啓示を受けているために、一層はげしく過去の罪にさいなまれている。

小径のうちどれでも好みのものを取りうるという意識だ。他の径よりもこちらに惹かれるというような点は何ひとつなかった。ぼくは馬鈴薯を味わう喜びにひたって一つの径を踊りながら駆けていった。ぼくは自由だった。ぼくは選んだのであった。

いったいどのようにしてぼくはぼくの自由を失ったのだろうか。ぼくは後戻りしてその物語を一とおり語らねばならぬ。まことに奇妙な物語だが、外見の事実はごくありふれたものなのだからその点で奇妙だというわけではない。唯一の語り手であるぼくにその物語が姿を見せるその現われかたが奇妙だというのである。なぜかといえば時というものは、煉瓦を一列にならべるように限りなく敷きのばしてゆくようなものではないからだ。あの直線は誕生のしゃっくりから臨終の喘ぎまで死物である。時には二つのありかたがある。そのひとつは鯖における水のような、われわれにとって生得の、努力なしの知覚である。他のひとつは記憶であって、いりまじった渦巻きを感ずること、ある日がより重要なるがゆえに他の日よりより近くに感ずること、あの出来事はこの出来事を反映していると感ずることであり、この三つはばらばらのもので、まったく直線からはずれた異例のものなのである。ぼくは公園における一日をぼくの物語の初めにおいたが、それはぼくがほとんど赤ん坊といってもよいほど幼かったからではない、馬鈴薯を味わうことが少なくなればなるほど自由がますます貴重なものになっていったからである。

ぼくはあらゆる体系なるものを、役にたたなくなった帽子の列のように壁にかけておいてある。みんな合わないのである。それらは外部から来たもの、これはどうかと示された型式であり、いっこう冴えないのもあればひどく美しいのもある。だがぼくも生まれてからもう大分になるのだから自分の知っている範囲の物事に何によらず適合する型式が必要になってきているのだが、さてそれをどこで見いだしたらいいのか。それならば何故ぼくはいまこういうことを書きつけているのか。これがぼくの求めている型なのであろうか。列のまんなかにあるマルキシズムという帽子、あれが生涯保つと考えたことがあろうか。キリスト教の聖職帽というやつはほとんどかぶってみもしなかったが、あれはいったいどこが具合が悪いのだろう。合理主義というニック（主人公のグラマー・スクールでの教師、ニック・シエイルズ）の帽子は雨をよく弾いてくれて、見たところは冴えないがなかなか品もあり、これこそ無敵の金札鎧と思われたものだ。それがいまでは縮んで何だかばかげて見え、この山高帽子はあらゆる山高帽子の例にもれず、たいへん形は整っていもし、たいへん完全でもあるが、またたいへんに無知なのである。それから学校帽もある。

あれをあそこに掛けたのはそのころ並べて掛ける他の帽子を知らなかったためにすぎないのだが、そのころというと、あの事がおこったとき――やがて自分の自由を奪うにいたった決定をぼくが自由に行なったときのことである。

なんでぼくは帽子のことなんぞで騒ぎたてる要があるのか。ぼくは芸術家だ。ぼくはどんな帽子でも好みのものを冠ることができる。ぼくは君たちと存じのサミュエル・マウントジョイで、ぼくの絵はテイト・ギャラリイにかかっている。ぼくがどんな帽子をかぶろうと君たちはとやかく言うまい。ぼくは食人種にだってなれないものではない。だがぼくは帽子を人目につかずにかぶりたいのだ。ぼくは理解したいのだ。灰色の顔の群が肩ごしにのぞいている。やつらを拭い去り追い払うすべはないのだ。ぼくの芸術もぼくには十分役にたたぬのである。あんなものは地獄に堕ちてしまうほうがいいのだ。性の強制のように発作が深い井戸からぼくをつかむ、そして他の人々はぼくの絵をぼくが好むより好み、ぼくが考えるより重要だと考えている。心底においてはぼくは鈍い犬なので、悧巧であるより善良でありたいのだ。

それなら何故ぼくはいまこれを書きつけているのか。それよりも芝生のまわりをめぐりにめぐって、自分の記憶を組織しなおして意味のあるものとし、柔軟な時の流れを解きほぐして改めて編みあげるほうがいいのではないか。やる気さえあれば、ぼくはあれこれの出来事を結びつけもできれば、跳びこしもできる。今日の芝生のひとまわりを体系にしたて、翌日また別の体系を見いだせもしよう。だが芝生のまわりをめぐりにめぐって考えてみたところで、もはやそれでは十分ではない。ひとつの理由をあげれば、それは四角のキャンバスのようなものだからだ。どんなに巧みに描こうと場所に制限があるのだ。頭脳というものもこういう制限以上は包含できないのである。だが理解には、思いだされる時の総体を一挙にとりこんで、それから一休みするという働きが必要なのだ。もしぼくが自分に現われるままにぼくの物語を書いていけば、おそらくぼくは後戻りして選択することができよう。生きるということはあらゆることであるがゆえに何ものにも似ていない――手ぶらで考えるにはあまりに微妙でありあまりに豊かである。絵を描くことはたったひとつの態度のようなもので、選択された事なのだ。

もうひとつ理由がある。唖で盲なのにわれわれは見なければならないし、語らねばならぬ。それはサミイ・マウントジョイの刈り株畑のような顔、くわえた巻煙草を手に抜きとるために開くふくらんだ両の唇についてではない、内側の、歯のまわりの滑らかな湿った筋肉でもないし、咽喉でも、肺でも、心臓でもない――およそ君が

食卓の上に彼をのせてナイフをとったとすれば見たり触れたりできる彼の肉体的部分ではないのである。それは彼のまんなかに座している名状しえぬ、把捉しえぬ、眼に見えぬ暗闇なのであって、つねに目覚めており、君がこうもあろうと信じているものとはつねに違っており、何を考え感じているのか君がけっして知ることができぬことを考え感じており、理解し理解されることを絶望しながら希望しているものなのである。われわれの孤独は独房の孤独でもなければ難破者のそれでもない。原子炉で行なうように反射でものを見、遠隔操縦で感じ、外国語で電話された言葉のみを聞くあの暗きものの孤独である。伝達することはわれわれの情熱でもあるがわれわれの絶望でもある。

では誰と伝達するのか。

君とか。

ぼくの暗闇はその触手をのばして、タイプライターを叩く。君の暗闇は君の触手を伸ばして本をつかむ。が、われわれのあいだには変化、濾過、翻訳の二十もの様式が介在するのだ。あの娘の頬のそっくりそのままの様、あの半透明の甘美さが、眉毛と髪のあいだの生きた骨の曲線そのものが、損われずにこの伝達の道を通りおおせたとしたら、なんという稀な偶然であることだろう！ まっくらな独房でのぼくの恐怖、その気持をぼくは思いだすことができるだけでぼく自身再現してみることができぬのに、君にその気持を共有することがどうしてできよう。いや、君との伝達は不可能だ。あるいはある程度までしか、可能ではない。君はそこにいなかったからだ。

そして君はそもそも何者なのか。君は事情に通じているというのか、この本を校正刷ですでに手に入れているとでもいうのか。だとすればぼくのやろうとしている仕事は無意味なわけだし、支離滅裂なことを支離滅裂に翻訳して君を怒らせたってはじまらぬのだが？ が、おそらくいまから五十年もたってから君は屋台店でこの本を見つけたのだが、それは現在ここにあるものとは違っているのである。星の光はその星がなくなってから何百万年もしてわれわれに届く、そういう話だが、おそらく本当だろう。われわれの中心にある暗闇がそのうちにあって平衡を保っている宇宙とはいかなる宇宙なのだろうか。

こういう希望はある。ぼくはある程度までは伝達しうるかもしれぬということだ。そしてそれはまったく盲目であり唖であるよりもましだ。それから自分のものとして冠る帽子みたいなものを見つけることができるかもしれない。といって一分の隙もない首尾一貫をめざしているわけではない。われわれの犯す誤りは自分たちの限界を可能性の境界と混同して宇宙を合理主義か何その帽子にほうりこんでしまうことである。だがぼくはある型式

の帽子、たとえ外側の縁が尾を引いて無知につらなってはいてもぼくを包んでくれる型式の帽子の、さまざまな徴表を見いだせるかもしれないのである。伝達はどうかということになれば、人々の言っていることをすべて理解するということはすべてを宥すということである。しかし迫害された者以外の誰が迫害を宥すことができよう。そしてその通信のさいに電線が不通になっているとしたらどうであろう。

これから描く絵のいくつかのものにたいしてはぼくは責任を持たない。子供の時分に自分がどのようであったか、それはぼくも思いだすことができる。しかしぼくがその当時人殺しをしたにしても、ぼくはいまさらその責任を感じはしないだろう。ここにもまた闕というものがあるのであって、それを越えたところではわれわれによってなされたことは誰か他の者によってなされたのだ。しかしぼくはそこにいたのである。おそらく、理解するためにはあの幼い日々の絵もまた取りいれなければならぬだろう。おそらく自分の物語をふたたび通読すれば、泉の水のように澄んだ少年と、よどんだ池のような大人とのあいだにある関連が眼に見えてこよう。どうしてかは知らぬが、前者が後者になったのだから。

ぼくは父親を知らなかったし、母親もまた彼を知らなかったと思う。むろん、たしかなことはいえぬが、母親は彼のことを知らなかったと信じたい気がする——少なくとも社会的には知らなかった、もっとも社会的という言葉をあらゆる有用な意味の外に局限すればべつであるが。ぼくの直接の祖先の半分はまるで雲をつかむようなものなのだから、ぼくはそれについて騒ぎたてる必要があろうとはほとんど感じないのである。ぼくは存在している。タイプライターの上にかざした煙草で汚れた指、椅子をおしつけるこの身体の重みで、二人の人間が会ったことに確信がもてるので、そのひとりは母だったのだ。もしそういう機会があるとすれば他のひとりはぼくをどのように考えるのだろうか。ぼくはどんな祝典を祝ったらよいのか。一九一七年には勝利があり敗北があった、そして革命があった。このようなさまざまな事柄に直面して、たかが一人の小さな私生児がいったい何であろう。あの片方の人間は兵士で、その後粉々に吹きとばされてしまったのか、あるいは生きのびて歩み、進化し、忘れ去っているのか。彼がもし知っていればぼくとぼくのはなばなしい名声を誇りにするのももっともであろう。ぼくは彼と会って、雲をつかむような顔に顔をつきあわせたことさえあるかもしれぬ。だがそれにしたところで、それと認知はできなかったろう。果樹園の壁の上で本のページをひるがえしても、風は知らぬように、ぼくは彼

のことを知らぬだろう。無学な風が黒い鉄の列を解読できぬようにわれわれ他人は他人の顔を解読できぬのである。

しかもぼくの発条は巻かれたのだ。ぼくはかちかち音をたてている。ぼくは存在している。君がいま読んでいる黒い鉄の列のうえ十八インチのところでぼくは頭を保っている、つまりぼくはいまの君の位置にいて、肉体に閉じこめられたままに白紙の上にぼく自身を固定させようと努めているのである。鉄の列がぼくと君を結びつけるが、いくら熱をいれてもぼくたちは分離感以外の何ものも共有することはないのだ。それなら親父のことなんぞ考える必要がどこにある？　彼になんの意味があるのか？

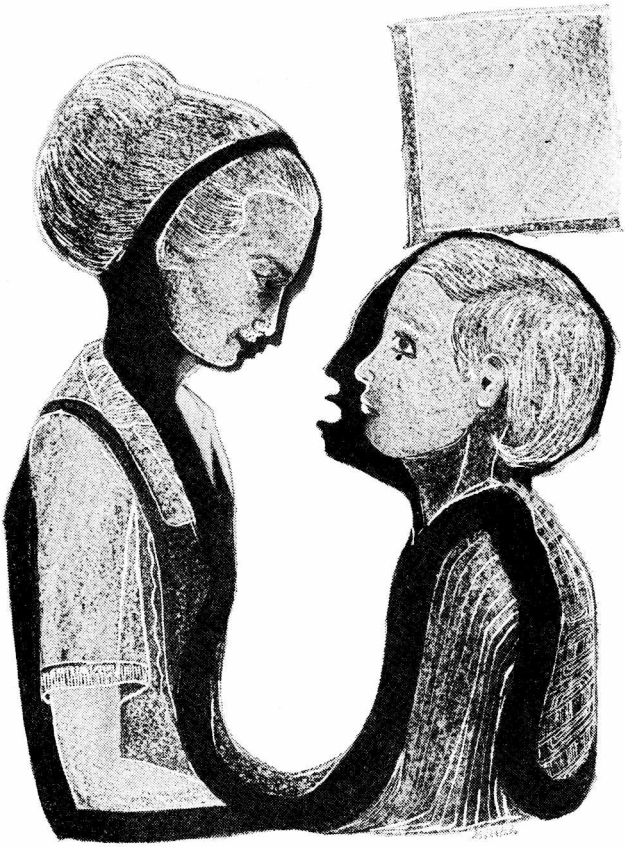
だが母はちがっていた。母にはなにか秘密の能力があって、それはおそらく牝牛や敷物に寝そべっている猫が持っているような能力であって、彼女をして理解力に依存せずにすませた或る資質であった。母は接触だけで事足りたのであった。それが彼女の生活であった。ぼくが成功したと聞いても彼女は心を動かさなかったろう。無関心であったろう。ぼくの秘めた絵のアルバムのうちにあって、彼女は終止符のように完了し達成されているのである。

時折ひょいとそんな気持がおこって、母に親父のことを訊ねたこともあったが、そういう好奇心だって是が非でもというのではなかった。おそらくぼくが問いつめたら、母は正確なところを答えてくれたかもしれぬ――がそれでどうだというのか。母のエプロンのまわりに生きた空間がある、それで十分だったのだ。いつも編上靴をはいている子供たちがいたように自分の父親を知っている子供たちがいただけだ。ぴかぴか光る玩具もあり、自動車もあり、人々が優雅に食事をする場所もあった。しかしこういうものはぼくにとっては壁にかけた絵であり、別世界のものである点、火星の世界と同じことであった。実の父親がいたにしてもそれは考えられぬ付加物だっただろう。だからぼくの質問も夕方、酒場が開かれる前か、夜ずっとおそくなってサンが閉まり、母がほろよい機嫌になったころに、もちだされるのだった。お伽話をしてくれとせがむのと同じことで、たいした関心もあるわけでもなく聞かされたことを信ずるわけでもなかった。

「パパはどういう人だったの、ママ？」

ぼくたちは二人とも単なる物質的事実には無関心だったから、聞かされる返事はその時々の母親の白昼夢が変わるにしたがって変わっていた。こういう夢は「サン」での影響や映画館での映画の筋の影響を受けていた。ぼくはそれが白昼夢だと知っていたし、自分も白昼夢を見るたちだったから、それとして受けとったのである。真

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.



実にあくまで冷然と即そうという態度のみがそれらの話を虚言ととがめたであろう。もっとも一度か二度母の道徳観念の芽ばえみたいなものが、話をしたあとでほとんど追うようにして彼女にそれを取り消させたことはあるが。結果としてぼくの父はある時は軍人で、すばらしい男で、士官だった。もっともぼくを懐胎したころには母は士官や紳士の対象とされる年齢をすぎていはしなかったかとぼくは思うのだが。ある夜リーガルから、戦闘艦がアメリカ沖で爆撃される映画を見て帰ってきたときには、父はイギリス空軍の所属になっていた。その後二人の生活で——こんどはどういう祝典が行なわれることになったろう。騎馬が濶歩し、軍帽に羽根飾りが輝き、群衆が歓呼をあげる、そういうことになった。つまり、父は皇太子その人となったのである。

むろんぼくは信じはしなかったにせよ、これはぼくにとってどえらいニュースだったから、そのときの火床の柵棒の向うの赤い炎の輝きが残像のようにぼくの網膜に残ったくらいである。ぼくたちはそんなことは信じなかったにせよ、その神話は汚ならしい床の中央できらめき輝いて、ぼくの臆病な発明力を超えたものとして感謝の念で迎えられたのだった。それでいて母は投げだすか投げださぬうちに、たちまちそれを取りもどしにかかった。話があまりに途方もなさすぎたのか、あるいはおそらくその白昼夢があまりに私にわたるので他人にわかつに忍びないといった態であった。炎の輝きを受けた母の眼がとまどい、照らされた顔のかすかな羊皮紙様の色が動揺し変化した。母は鼻をすすり、手で鼻を掻き、ジンに酔った安易な涙を一滴二滴おとして、火の衰えた、火床に話しかけた。

「あたしゃ酔っぱらいの嘘つきさ、ね、お前、そうだろう？」

そのとおりなのだ。非難する気持なしに、ぼくはそうと知っていたが、やはり失望はしたのである。ぼくはクリスマスが消えてしまい金ぴかの飾りものが霧散してしまったような感じがした。ママの架空の恋人にもどる必要をぼくは認めざるをえなかった。皇太子、軍人、航空隊員——だが娼婦というものは牧師の娘だと言いたがるものだ。そして宮廷生活の燦然たる光輝にもかかわらず、教会が勝利を収めたのであった。

「パパはどういう人だったの、ママ？」

「牧師さんさ。いつも言ってるじゃないの」

大体において、それはずっとぼくの恋人でもあった、といってよかろう。父とぼくのあいだには分離があるだけで何ら共通のものはないだろうが、少なくともこのことだけは認めなければなるまいと思っている。つまり、ぼくは父の顔の奥に、人を動かす力、悪魔、絶望を認め

るべきであり、知覚がひっきりなしに一の信条に合致しようとして歯を食いしばって苦闘したあげく、ついには中国人の脚のようにひん曲がってしまっているのを認めなければいけないのだ。苦しい思いをするときに、自分は父を介して善なる所業に結びついているのだと、ぼくは心慰めたものだ。だからぼくとしては父が何か方便の仕事や道義的な関心のない仕事はしていなかったと思いたいのである。ぼくの自尊心は父が肉と必死に取っくんだと思いたいのである。軍人というものは伝統的に肉を愛し、そしてそれを棄ててかえりみないものだ。だが坊主というものは、節制や独身を看板にしようと、司祭、牧師、長老というものは――、当然ぼくは、いったん許されたと思ってもいまは極悪さが見えすく罪の古傷なのだ。自分がどこか牧師館か司祭館か長老邸かあるいはその構内でつぶれ破れる、忘れられた膿瘍のようにつぶれ破れたらいいと思っている。坊主もぼくと同じような人間で、罪とはねんごろの仲なのである。そこにこちらのつけ目があろうというものだ。

では、どの宗派か。ほんの一日か二日前、ぼくは横町を歩いたが、そのとき、さまざまな宗派の教会の前も通ったし、小礼拝堂を過ぎもし、古い国教教会と大きな牧師館の角もまわったのである。ぼくの架空の恋人をどの教派の所属と宣言しようか。国教会、教区牧師の教会か？　だが親父は当初は世俗の紳士だったのが後に牧師になったので、ぼくと同様アマチュアだったのではなかろうか。当節は托鉢の修道士だって仕立てのいい僧服の下にズボンをのぞかせて歩きまわっている。自動車で見世物よろしくやってくるのだから、ブラウン・ウィリーかどこかのドルイッド教徒を思いださせるのである。では親父にローマン・カトリックを選ぼうか。その実質をいくらこちらで嫌ってみたところでこの本職の教会というやつは厳として存在するのだが、私生児の身で、袖をひっぱるような具合にこの教会の心をひっぱってその実質をたぐりだすわけにもいくまい。非国教の諸宗派ときたら、あじけなくなるほど順応的で、生焼けの徒党宗派、法典板だの礼拝堂だの寺院だの――ぼくもママと同様、そんなものには無関心である。そのくらいなら親父はむしろオッド・フェロウ*かエルクス慈善会員**であったほうがいいと思う。

「パパはどういう人だったの、ママ？」

ぼくは嘘をついている。君同様自分をあざむいている。彼らの世界はぼくの世界であり、罪と贖罪との、見せかけと悔悟との、泥にまみれた愛の、世界である。君は毎

* フリーメーソンにならって十八世紀イギリスに創設された一種の秘密共済組合の会員。

** アメリカで一八六七年創立された社交慈善団体のメンバー。

日ぼくの生命の血そのものを売買しているのである。ぼくは君たちのひとりで、憑かれた人間である——何に、あるいは誰に憑かれているというのか。まあ聞いてくれ、これがぼくの叫びの声だ、つまり、ぼくは知的自由のうちにあって君たちのあいだをずっと歩きつづけてきたのに君たちはぼくを唆して自由から遠ざけようと決してしてはくれなかったのだ。それというのも一世紀ものあいだ君たちは唆されて自由にひきつけられてきたのだし、フェアプレイが、聖人のふりをしないこと、実際のところ聖人ではないことが、いいことだと信じて疑わぬからである。君たちは自由をつかうことのできぬ連中に自由を譲りわたし、宝石を塵芥にまみれるにまかせたのだ。ぼくは第三者には通じない君たちの秘密の言葉で話す。ぼくは二つの意味で君たちの兄弟であり、自由はぼくの呪いだったのだから、その塵芥を君たちに投げつける。そうすれば傷には吹きだして命にかかわる膿がなくなるから、ぼくは勝手にそれをつつけようというものだ。

「パパはどういう人だったの、ママ？」

ぼくのことを父に知らせたってしかたがないのだ。ぼくは自分であのあたたかい動悸（性交時のオーガズム）を知らないわけではないが、その後にくる徐ろな成長にくらべれば、肉体的にいって父性などというものは物の数ではないと思っている。われわれは子供というものを持たぬのだ。ぼくの親父は男というようなものではなかった。肉眼では見えぬおたまじゃくしの恰好をした斑点にすぎなかった。頭もなければ心もなかったのだ。誘導ミサイルのように特殊な魂なきものだったのである。

ママはぼくと同様玄人ではなかった。この母にしてこの子ありである。ぼくたちは二人ともに心底ではアマチュアであった。ママは実務の能力も持っていなかったし、いい暮らしをしたいとも出世したいとも思っていなかった。それかといって母はふしだらな女とはいえなかった、なぜならそのようなことにはある種の規準があって、そこから母がはずれていた、いないということが前提となるからである。ママは風儀を超越していたのか、風儀に達せぬところにあったのか、あるいは風儀の外にあったのだろうか。今日だったら彼女は知能指数の低い人間に分類され、自分の欲しなかった保護を加えられることになったろう。在りし日にも、もし彼女があんな具合の物に動じぬ無関心を身につけていなかったら、ばか呼ばわりをされたにちがいないのである。母は「サン」で少額ではあったが彼女にとっては大事な金額を馬に賭った、酒をのみ映画館にかよった。仕事は、手当たりしだいのことをやった。彼女は日雇いの雑用をした、彼女は——ぼくも手伝ったが、ホップを摘んだり、ぼくたちが住んでいた路地から難儀せずに行ける範囲の公共の建物で掃

いたり洗ったり中途半端な磨き仕事をしたりしていた。母は性的な関係を持たなかった、というのはそれは予防的な交渉、浴室から持ってきたベッサリーで懐胎の可能性を禁じてしまう、愛なく喜びのない快楽の洗練を意味するからである。母は愛の睦言を言ったことがない、思うにそれは男女をへだてる壁が崩れ落ちるのを確認したいという激しい願いのさせる業だからである。母はそのようなことは何ひとつしなかった。もししたとすれば、母はあの特有の、言葉の区切りのはっきりしない、だらだらつづく独り言によって、長いポーズを時折はさみながら、二人はどうあっても一心同体の母子だという前提にたって、ぼくに語ってきかせたにちがいないのだ。そうだ、母は生物だったのだ。ただ夢中のうちに、けたたましく笑ったり溜息をついたりしながら、乳母の乳首のように快楽をあたりに分けてやったのだ。折にふれての彼女の性交渉は彼女にとっては真の芸術家にとっての自分の作品のようなもの——それ自体でありそれ以上の何ものでもなかったにちがいない。それは余計な意味は一切持っていなかった。それは裏町や野原での出会いであり、詰め所や門柱や扶壁での出会い、それだけのことであった。歴史におけるたいがいの人間のセックスと同様で、心理、ロマンス、宗教上での利得を欠いた自然の営みであった。

ママは途方もない大女であった。若いころには丸ぽちゃの綺麗な娘だったにちがいないが、食欲と赤ん坊ができたため象よろしくの女にふくれあがってしまったのである。かつては魅力があったとぼくが推論するのは、彼女の眼が茶色の菓子パンみたいにふくらんだ顔に落ちくぼんではいるものの、まだ大きくて優しかったからである。その眼には艶があって若い年頃にはこの艶が彼女の肌全体に宿っていたにちがいない。けっして「いや」といえない女がいるものだが、ママをそういう単純な女と同じ扱いをするわけにはゆかない、もしそうならば彼女がこのようにトンネルの出口をふさぐなどということができるはずがないからである。このところ二、三ヵ月のあいだぼくはママを二握りほどの粘土で捕えたいと試みてきた——塑像によって彼女の外見を捕えるということではなく、もっと正確にいって、彼女の巨大さと現実性についてのぼくの観念、ただ無造作に視野をふさいでしまう彼女のやりかた、それを捕えたかったのである。彼女の向うには何にもない、何にもなくなるのである。彼女はぼくと冷たい光とのあいだに介在するあたたかい闇であった。彼女はトンネルの出口だったのだ、母は。

いまこれを書いているうちにぼくの頭に浮かんできたものがある。知覚が消えうせぬうちにその絵をつかまえておきたい。ママはぼくが思いだすにつれてひろがって

いき、部屋も家もおおいかくしてしまう。太った腹をふくらませて、彼女は自分の自信と無関心のうちに王座に坐るよりもどっしりと腰をおろしている。彼女は疑問を容れざるもの、良くもなければ、悪くもなく、親切でもなければ、無情でもないものであった。彼女は時たつうちにぼくが作った通路の彼方に朦朧と姿をあらわす。

彼女は驚かすが脅えさせはしない。

彼女はものを等閑にはするが歪めたり悪く利用したりはしない。

彼女は悪意や惨酷さなしに兇暴である。

彼女は保護するとか恩着せがましい態度をとらずに大人である。

彼女は所有欲を持たずにあたたかである。

しかし、何にもまして、彼女はそこにあるのだ。

そこでむろんぼくが彼女を思い出すのは粘土によって、並の土によってであって、ぼくは彼女のためにキャンバスをひろげてその上にもっともらしい商売用の色彩をなすりつけることもできないし、彼女の暗さ暖かさより一万年も若い言葉によって彼女の輪廓を描くこともできないのだ。いったい一の時代、一の世界、一の次元をどうやって描くことができるというのか。伝達がおよぶ範囲では、ただ彼女をとりまいているいろいろのものがあるだけで、それがひとつにまとまって展示されると、そのまんなかに穴があり、それが黙って存在していたママだということになる。ぼくは黄色味を帯びた灰色の物質の一片の記憶をいま釣りあげる。そのひとつの隅は擦れていて——というよりはいまぼくが考えるところでは、腐っていて——総べり、濡れた総べりのようになっている。他の部分はどこかママのまわりにまつわり懸かっていて、ぼくは指を上から握りしめられてぶらさがり、時々つまずいたり、上から降りてきている巨大な手で言葉もなくぐいと揺り動かされたりする。ぼくは母のエプロンのあの隅を探っているときの気持、それを見つけたときの嬉しさを思いだせる気がする。

ぼくたちは当時ロトン横町に住んでいたにちがいない、というのは羅針盤の方位のようにぼくたちの住める方角というものはすでにきまっていたからだ。便所は磨滅した煉瓦道と溝の向うにあって木のドアを開くと長い木の腰掛があった。ぼくたちの部屋の上には、間借人ではないことはたしかだと思うが、何かいるような気配がした。おそらくこの当時はいくらか収入がよかったのか、あるいはおそらくジンが煙草のようにやすかったのであろう。食器入れとして抽出しのついた箱がひとつあったし、ガス台には小さな鉄の戸棚だのドアだの引き出せるものがいっぱいついていた。ママはこうしたものは決して使わず、ただまんなかの小さなガスを使うだけで、その火の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.